

## < 16年産国産雑穀作付け拡大とその取り組み >

RIでは国内産雑穀の生産拡大のため、生産者・農協と種子の供給や栽培の連携をとり、生産を機械化することで省力化と生産規模の拡大によるローコストをすすめ、普及させるための価格の引き下げを実行しております。

昨年度の国内産雑穀作付けは10地区、70ヘクタールでしたが、来年度の200ヘクタールに向けて、16年産の作付け面積は150ヘクタールを目標としています。

今まで雑穀栽培は、高齢の方達が中山間地で手間作業にて行っており市場に出回っている国産の雑穀の価格が高い要因の一つでした。

機械化体系は国内には今までにありませんでしたが、昨年ごろからは試行錯誤の状態から抜け出せたと考えております。

### 雑穀栽培の15年産の成果と今年の課題

(生産現場の声から)

#### 播種(種まき)について

機械による播種により、人力の播種機の使用と比べた場合、80%程度の時間短縮ができることがわかりました。

(北海道:竹俣さん)

#### 除草について

農薬取締り法の登録農薬が1品しかなく、使用時の有効性も低く、除草剤による除草体系は難しいところです。除草剤を使用せずにトラクターによる中耕培土(茎根本への土を寄せる時に草も刈る)を2~3回行う事により対応しています。

(栃木:大貫さん談)

この中耕培土作業の有無で、反収(10アールあたり収穫量)に何倍もの差がでました。今年からは、発芽してから2ヶ月は雑草の生育の方が早いので、生育に合わせて作業することにより有効な除草が期待できます。

#### 収穫について

大豆やそば、麦などを刈り取る汎用コンバインで、きび、あわも刈り取りできることがわかりました。きび、あわなど雑穀は、小粒なので、当初は草の実などと一緒に、飛んでいってしまうのでは

ないかと思いましたが、予想以上(約2倍)に収穫できたので驚きました。機械による収穫の見とおしは立ったと思ってもらって良いでしょう。(北海道:鈴木さん談)

今までの雑穀栽培産地は、機械(汎用コンバイン)で収穫することはほとんどありませんでした。手刈りで10アール3日かかりました。機械で収穫すると30分で収穫できます。

#### 乾燥について

雑穀は、栽培するより収穫後の乾燥が一番大変でした。まだ手間作業は解消できない状況ですが、今年は、連続してできる縦型乾燥機を動かそうと思います。乾燥作業がクリアできれば、面積拡大することは容易だと思います。(山形県:小野さん談)

15年産の乾燥は、静地式(穀物を筒状の缶に並べ風を送り込む)と天日乾燥(穀物をシートの上に並べ自然の乾燥)の2つの方法で、それぞれ3~4日かかりました。これでは効率が上がらず、栽培面積の拡大につながらない状況でしたが、16年産は、乾燥が連続してできる縦型乾燥機を使うことを計画しており、乾燥調整が1日でできる可能性がでてきました。

価格を下げるのひとつとして、生産現場において、反収(10アール当たりの収穫量)を上げることが必須です。

RIでは、農水省やつくば市・花巻の農業技術担当の方々や、乾燥機・精穀などのメーカーとの情報交換及び協力を得ながら、生産者からの相談などに対応し、生産者を支援しております。

4月から減反が緩和されいろいろな穀物の輪作体系を確立する必要がでてきました。日本の食料需給率は平成14年に40%で、お米、麦に加え、様々な雑穀を生産し、国内の食料需給率を上げることがより一層大切になってきました。そのことは最近発生しています海外の食糧依存への警鐘とも重ね合わせられます。

穀物の多様な使用方法のアンテナショップとして、東京の有楽町交通会館にご相談窓口を開設しておりますのでご利用ください。